

「かかりつけ医」と私

読売新聞 東京本社
千葉支局長

石井 仁



開催回数13回、総参加人員約1930人——。これは、昨年6月から、県内各地で県医師会会員の皆様と読売新聞を扱う販売店とで始めた地域密着型の貢献活動「ちば健康塾」の平成18年度開催実績である。

「熱が下がらない」「腹痛が続く」「腰を打った」。ひと昔前は、病気やけがで地域の人が駆け込んだのは、家族や家庭環境まで熟知していた「かかりつけ医」の診療所だった。

ところが、最近はこのような緊密な信頼関係が薄れ、地域での開業医の顔が見えなくなっているように感じる。地域医療の崩壊もこうした点に起因するのかもしれない。

地域医療と「ちば健康塾」

しれない。

今年度も引き続き県内各地で開催する「ちば健康塾」は、地元の医師が講師を務めることから、地域の人たちに医師の顔が身近に見え、親近感と信頼感が新たに生まれつつあるのが大きな特徴だ。医師会が取り組む「かかりつけ医」推進運動にも貢献できると思っている。

私ごとになるが、この6月で単身赴任生活も13年7か月目に入った。この間の転勤回数は6回。幸運にも病院通いをすることもなく過ごしてきた。「身体的危機」をあえて挙げるなら、山形支局長時代に体験した「魔女の一撃」とも言われる「ぎっくり腰」だが、これは、薬局で購入した貼り薬で治ってしまった。

病気の数は、ざっと1万5千あると言われているだけに、今は、「よくぞ無事で」と己を褒めてあげたい心境である。ただ、55歳を超え、心配ごとは、不規則だった「単身赴任生活のツケ」。今後も健康な人生を送れるかどうかは、信頼できる「医学の眼」を持った「かかりつけ医」に出会えるかにかかっている、と正直に思う。医師会の地域連携活動の一翼を担う「ちば健康塾」を主導しながら、私の「かかりつけ医」を見つけたいものである。

「かかりつけ医」は、身近なナビゲーター。

幅広い医療知識と適切な医療ネットワークで頼りになります。

「かかりつけ医」を
持ちましょう。



社団法人 千葉県医師会

自己判断より、すぐ相談

「かかりつけ医」は、病気の時だけでなく、予防や健康管理について適切なアドバイスをしてくれる、身近な診療所の開業医です。多くの専門医療のネットワークを持ち、必要に応じて適切な専門医を紹介するなど、治療の道しるべをつけてくれるナビゲーターとして頼りになる存在です。

「かかりつけ医」は、開業医になる前は大学病院や公立病院などで長い勤務経験を積んでいますので、病気の診断や治療については大病院の医師に劣ることはありません。高度な医療や特殊な検査が必要な場合は、大病院と連携を図っていますので専門医に紹介状を書いてくれます。いざという時、「かかりつけ医」はあなたの味方です。